

県北における小豆の栽培法について

1. 試験のねらい

県北地帯における麦+小豆の作付体系において、黒磯在来等の品種では早播しても成熟期が10月下旬～11月上旬と遅く、麦の適播種ができないという問題がある。そこで、従来より早生・大粒品種の選定を行い、その栽培法について検討した。

2. 試験方法

試験は栃木県農業試験場黒磯分場の転換畑（表層腐植質多湿黒ボク土）で実施した。品種は北海道立十勝試験場育成のカムイダイナゴン（十育122号）を用い、播種期6月20日から10日毎に4回、栽植密度5.6株区（60cm×30cm）、8.3株区（60cm×20cm）を設けて検討を行った。

3. 試験結果および考察

平成元年～4年にかけて行った生育収量調査の結果を表-1に示した。

- (1) 播種期、6月20日及び7月1日播は成熟期が9月下旬であった。また、7月10日及び7月20日播は成熟期が10月上旬～中旬となり、早播すれば成熟も早まる結果を得た。以上のことからカムイダイナゴンは早播すると成熟期が9月下旬となり、水稻の収穫作業と競合することから、播種期は10月上旬～中旬に成熟期に達する7月中旬～下旬が適期と考えられた。
- (2) 栽植密度、5.6株区と8.3株区の子実重を図-1、図-2に示した。各播種期とも8.3株区の密植区が多収であった。この結果、カムイダイナゴンは、在来種に比較して生育量が小さいため、密植が有利と考えられた。

4. 成果の要約

県北地帯における麦+小豆の作付体系において、品種の選定を行い、早生種で大粒のカムイダイナゴについて栽培法を検討した結果、播種期は7月中旬～下旬、栽植密度では8.3株区が多収を得た。しかし、栽植密度については株間、畦幅とも更に密植した試験が必要と考えられた。なお、品質については大粒であったが、粒色は暗赤であった。

（担当者 黒磯分場 古田土 通）

表-1 生育収量調査 (平成元、2、4年の3カ年平均)

品種名	供試条件		生育の 良否	開花期 (月日)	成熟期 (月日)	主茎 長 (cm)	主茎 節数 (節)	分枝 数 (本)	1株 莢数 (莢)	1莢 粒数 (粒)	a当 子実重 (kg)	百粒 重 (g)
	播種期 (月日)	株間 (cm)										
黒磯 在来	6.20	20	良	8.29	10.24	64.4	18.0	4.6	36.5	4.7	17.1	15.5
		30	"	8.30	10.23	53.2	17.6	5.6	51.8	4.8	17.4	15.0
	7.1	20	"	8.31	10.22	55.9	17.0	4.5	34.8	5.1	19.9	16.7
		30	"	8.31	10.24	54.1	17.2	5.6	44.6	5.4	18.8	17.1
	7.10	20	"	9.1	10.24	48.8	15.5	3.7	32.8	5.5	19.2	16.5
		30	"	9.1	10.24	51.9	15.9	5.0	41.5	5.1	15.7	16.5
7.20	20	"	9.5	10.26	25.2	11.3	2.0	18.6	6.2	15.4	17.8	
	30	"	9.5	10.26	30.9	12.9	2.5	24.9	6.1	14.1	17.6	
カム イ ダ イ ナ ゴ ン	6.20	20	良	8.4	9.24	42.4	13.7	2.4	35.6	4.4	18.1	17.2
		30	"	8.4	9.24	47.4	15.2	3.2	50.7	4.2	15.6	16.5
7.1	20	"	8.14	9.28	36.3	12.5	2.2	30.7	4.9	20.9	19.1	
	30	"	8.14	9.29	40.5	14.1	2.6	46.7	4.4	18.4	18.7	
7.10	20	"	8.20	10.6	35.4	12.5	2.5	32.3	4.7	23.9	20.4	
	30	"	8.20	10.7	32.8	12.3	3.0	40.1	4.4	18.1	19.6	
7.20	20	中	8.30	10.12	21.3	8.3	1.6	16.0	5.0	15.5	24.1	
	30	"	8.30	10.12	20.3	8.3	1.5	17.5	5.4	12.1	23.4	

- 注1. 6月20日播は平成元~2年の2カ年平均。
 2. 7月20日播は平成4年の1カ年のデータ。
 3. 平成3年は湿害のため除外した。

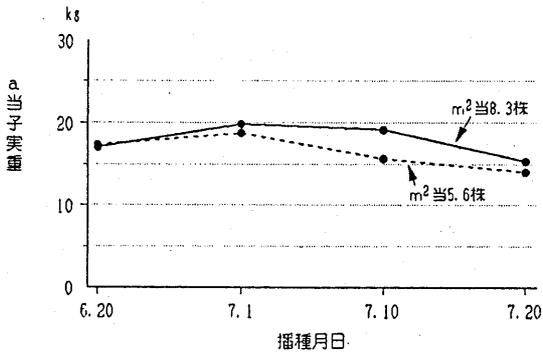


図-1 黒磯在来

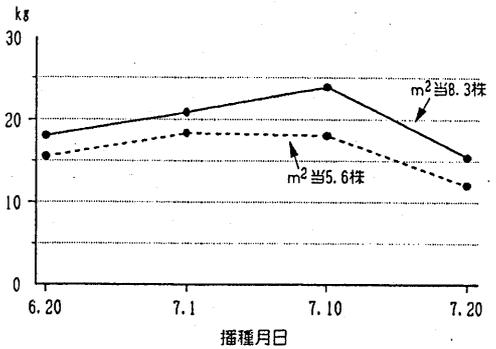


図-2 カムイダイナゴン